

遙かなる風雪

(21)

実録・柴田音吉洋服店

古きよき時代——裏地、釦、在庫が6万円

チーフ・カッター白崎治郎助は欧米の洋服技術を柴田の店に本格的に取り入れたが、その日常もまた欧米風であった。昭和初期といえはまだまだ労働時間は長く、仕事があれば夜まで働くことは珍しくない。柴田では一応の退社時間を決めていたが、急ぎの注文品を置いて帰る者はいなかった。

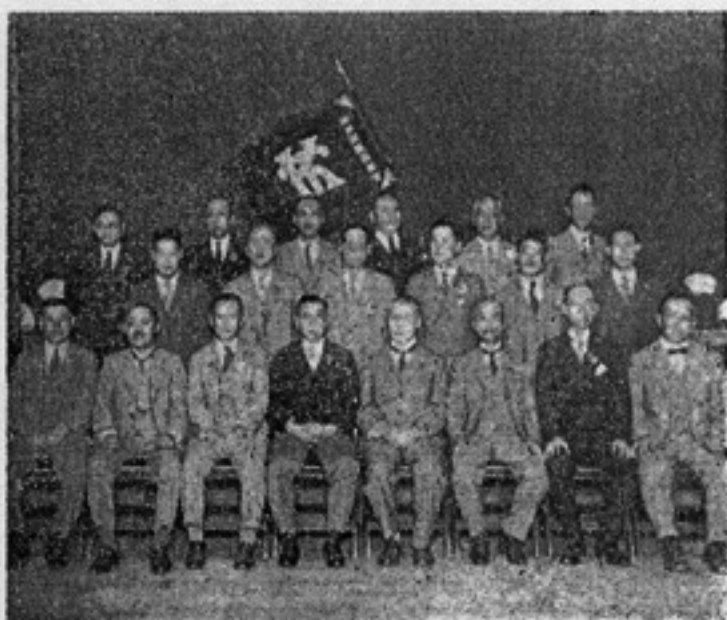
ところが白崎治郎助に限って退社時間が来るとサッサと帰る。長く居たアメリカでの合理主義をガンとして貫いた当時珍しい人物だった。

「賞与はいりません、私は月給をカッチリ頂きます」といったが、音吉は彼に10カ月分の賞与を渡した。それだけ実力のあるカッターだった。カッターは彼の下に2人いた

昭和初期110人の社員をとりしきる大番頭沢田舜は柴田史上欠かすことのできない人物だった。勤厳実直、音吉とは好対照の地味な人柄で内を守り続けた。彼の下に何人かの古くからの優秀な人材がいて屋台骨を支えていたことも見のがせない。

× ×

洋服部の職人、丁稚たちの



神戸洋服組合長として一前列左から四番目が二代目音吉

生活は大正時代からさほど変わっていなかった。

名人肌は多く、よく働くがよく遊びもした。

店の食事は初代以来の伝統で量と質も相変わらず良かった4日に一ぺんビフテキがつき外回りから帰って食事時間間に合わなくてもいつも温かい御飯が用意されていた。

「よく働く者には温かいものを出せ」と音吉が3人の炊事婦にいい含めていたからだ

× ×

この時代、店の収支決算はまことにのんびりしたものだった。洋服部の年商は35万円。ところが店卸しのとき何

と裏地、ボタンの在庫量が6万円もあった。

「また6万円もあるノ」と音吉は怒ったが、それも道理現在3億5千万の年商で6千万円のボタン類が転がっていることを想像すればそのケタはずれぶりがわかる。

箱やトランクいっぱいマスで計るほどあるボタンはどれも最高品質の輸入品だ。探すのが面倒でつい発注する。しかも一箱単位だから溜まる一方だった。

ずっと後になって物価統制令にともなう一時廃業の時期、ボタンの処置に困った柴田の店ではこれを時節柄捨てるわけにはいかず安い値で売った。

その後O・SIBATAのネーム入りのボタンが流れ流れて山陰のある洋服店作成の背広についていたという裏話がある。動乱期、そして物のない時代ならではのひとこまであった。(つづく)

岡 和子記者



昭和8年第1回みなと祭に揃いのユカタで楽しむ柴田音吉商店社員